

報告

AAFITN 2025@バンコクに参加して

江面正幸

国立病院機構仙台医療センター 脳神経外科

(2025 年 8 月 28 日受稿、2025 年 8 月 28 日受理、連絡先：江面正幸・仙台医療センター)

WFITN と AAFITN

私が専門にしている脳血管内治療の最も中心的な国際学会は World Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology (WFITN) で、1991 年に設立され以降 2 年に 1 回奇数年に開催されてきた。これのアジア版が、Asian Australasian Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology (AAFITN) で、1994 年に設立され、WFITN の中間年にアジア・オーストラリアのどこかで開催されてきた。つまり、毎年 WFITN が開催されるということだ。これに 1982 年から毎年 1 月にフランスの Val d'Isere というスキーリゾートで行われている Working group in Interventional Neuroradiology という学会を含めて 3 大国際学会だ。私は医師になって 15 年目の 2001 年くらいからは、3 大国際学会を中心に毎年 1 回は海外学会に参加していた。WFITN で訪れた都市は、アルガルヴェ (ポルトガル)、ソウル (韓国)、レシフェ (ブラジル)、ベニス (イタリア)、北京 (中国)、モントリオール (カナダ)、ケープタウン (南アフリカ)、ブエノスアイレス (アルゼンチン)、ブリスベン (オーストラリア)、ブダペスト (ハンガリー)、ナポリ (イタリア)、京都で、魅力的な都市が多いのと南半球が多い。AAFITN は北京 (中国)、仙台、香港 (香港)、バンコク (タイ)、台北 (中華民国)、名古屋、ダナン (ベトナム)、バリ (インドネシア)、コタキナバル (マレーシア) で、東南アジアの観光地が並びこれはこれでなかなかのライン

ナップだ。私は学会に出席するという目的のもと、南半球の大都市やフランスのスキーリゾート、東南アジアのビーチリゾートに行けるということだけでも、脳血管内治療を専門にして良かったと思っている。私がここに記載した国だけで 17 ヶ国にのぼるうえ、直行便がない関係で、ブエノスアイレスの帰りにパナマシティ、ブダペストの前にウィーン、後にワルシャワに泊まったりしているので、FITN 関係で既に 20 ヶ国以上訪問したということになる。

コロナにより WFITN2021 と AAFITN2022 が 1 年順延されたため現在は WFITN が偶数年、AAFITN が奇数年の開催となっている。コロナ前はほぼ欠かさず FITN に参加していたが、コロナで状況が一変した。AAFITN に最後に参加したのは 2018 年のコタキナバルで、2020 年のソウルと 2023 年の香港は不参加だったので、久しぶりの AAFITN ということになる。WFITN2022@京都 は国内だったので参加したが、海外開催となると WFITN2019@ナポリ以来の 3 大国際学会である。

バンコクへ (8/20)

学会は 8/21-23 だったので、出発は 8/20。今回は妻が自費にて同行しているのに加え、タイ料理好きの娘も一緒に行きたいということで娘は LCC で来てバンコクで合流することにした。バンコクの空港で待ち合わせと思ったら、私の便は HND1050-1530BKK、娘のは NRT0915-1440DMK となっている。バンコクには空港が 2 つあり、もともとド

ムアン空港（DMK）だったのが手狭になったということで近年スワンナプーム空港（BKK）をメインにしたということだった。羽田（HND）と成田（NRT）の関係に似ているが、タイではLCCが旧来の空港に割り当てられている。

ホテルで娘と合流して、バンコクの初日は会場下見も兼ねて学会場となっているアイコンサイアムへ。アイコンサイアムが何かというと、みなとみらいと考えていただければわかりやすい。イベントスペースもホテルも商業施設もアミューズメント施設も全て集まっているわけである。タイ初のアップルストアや高島屋も入っている。宿泊しているミレニウムヒルトンはこの施設に隣接する。パシフィコ横浜の学会で、インターコンチネンタルホテルに泊まっているようなものだ。

そうは言っても高級店やチェーン店ばかりでなく、1階は水上マーケットを模した屋台風のフードコートになっている。専用のスペースを持つタイレストランに入り、まずはビールを注文したら扱っていないからそのコンビニで買ってきてとのことなので、トムヤム麺とガパオライスを注文したあとに、コンビニでビールを買ってきて初日のディナーとした。

衛さんに見せて通用口みたいなのところからの出入りであった。それは良いのだが、その入場方法の情報は、私が既に仙台を出発して前泊の東京のホテルに着いてメールを開いたときが初見で、QRコードもそのメールに貼ってあった。ホームページには記載が追加されていたが、なんともドタバタ感を漂わせるスタートだ。

学会は8時から始まることになっており（図2）、

[illegible]

図 2. AAFITN2025 のプログラム

学会初日 (8/21)

学会場はアイコンサイアムの7階である(図1)。アイコンサイアムは10時オープンなので、それより前の入場は学会から送られてきたQRコードを守



図 1. 学会場入り口：商業施設と同じフロアなのでネームタグのチェックは厳しかった。

通用口を通して会場に行くも 8 時に始まる気配はない。8 時 15 分になってようやく始まった。東南アジアの学会のいつものパターンである。オナラリーレクチャー、オープニングセレモニーに続き、最初のセッションは「Women in INR」。これはタイの脳血管内治療の重鎮が、今回の会長の Anchalee Churojana と副会長の Sirintara Pongpech が共に女性であることも関連しているであろうが、やはりダイバーシティの潮流の大きさが一番の要因であろう。

私の発表演題は「Initial usage experience of JOIN smartphone application in NHO Sendai Medical Center」(図 3)。最近は実際の治療に関わっていないので、情報活用的な演題をひねり出した。私はポスター発表となったが、ポスターは 16 : 9 のスライド 1 枚を事前提出ということで、これも 1 週間

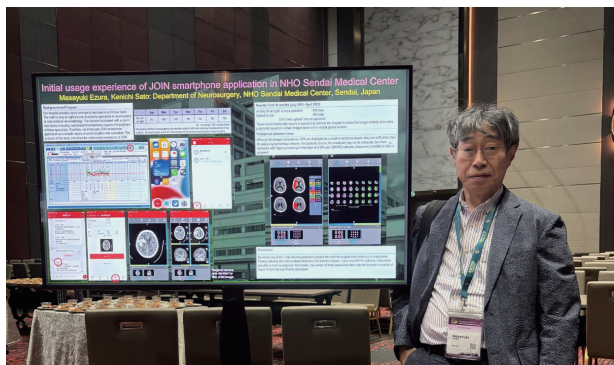


図 3. 筆者の発表ポスター：70 インチくらいの大型モニターでのプレゼンテーション



図 4. メイン会場

前に 1040 から 5 分のプレゼンテーションとの連絡があった。コーヒブレイクの時間に合わせてポスター発表という魂胆のようだったが、上述のようにスケジュールは開始からして圧倒的に遅れており、1040 にはまだ「Women in INR」をやっていた。念のため会場に行ってみるとメイン会場の進行に関わらず 1040 からプレゼンテーション開始。おかげで座長と次の演者の 3 人だけのセッションであった。発表が終わってメイン会場にもどるとまだ「Women in INR」をやっており、ほどなくコーヒブレイクをキャンセルして次のプレナリーレクチャーが始まった。これもアジアあるあるである。会場は 300 名くらい入るところがほぼ満員だったので、それなりの参加者数にはなっていたのだろう(図 4)。

ランチを挟んで、メイン会場では「Aneurysm」、第二会場では「Stroke」という構成。今回の学会のメインテーマは「INR in a changing world」であり、オープニングの挨拶では AI のことなどに言及していた。ちょうどメイン会場の午後の最初の

セッションが「Aneurysm, AI」とのことだったのでそちらを聞いたが AI に関する演題は 1 題のみであった。一方 Stroke の分野は血栓回収の有効性が示されて以来新規デバイスが続々と提供されている領域であり、また遠位小血管の塞栓症や後方循環の閉塞/狭窄、重症例をどうするかなど、まだまだ発展途上であり、聴衆はそちらの方が興味があるようだった。AI ということであれば私の演題などとても時宜を得たもののように思うが、実際は clinical, technical な演題が主体であり、アジアの脳血管内治療の学会で AI や DX を取り上げるのは時期尚早の印象であった。

学会 2 日目 (8/22)

バンコクは 3 度目であるが、アユタヤには行っていないことがなかった。幸い本日は私が注目しているセッションはない。それなので、アユタヤ観光に充てることにした。学会期間中の観光についてはいろいろな意見があると思うが、数日間の学会の 1 日の観光であれば許容範囲と考えている。そういえば WFITN2022@京都も 8/21 からであったが、学会 2 日目の 8/22 はやはりあまり聞きたいセッションがなかった。この日が何の日か覚えておいでだろうか。私は京都から甲子園球場に向い、仙台育英学園高校が勝利し深紅の優勝旗が白河の関を越えることになるその瞬間を現地で見届けたのであった。



図 5. ワット・プラ・シー・サンペット@アユタヤ：アユタヤ王朝の王宮遺跡。アユタヤはシャム王朝になる前のタイの支配的な王朝であったが、1765 年の泰緬戦争によって多くの建造物が破壊された。栄華を誇った王宮も現在は 3 つの仏塔が残るのみである。

アユタヤだけであればバンコクからの半日ツアーも出ているが、今回は欲張って1日ツアー。午前のメークロン線路市場、ワットパクナムとランチが含まれている。アユタヤ遺跡では遺跡を3ヶ所見学（図5）、ジョッドフェアズナイトマーケットで解散となり、タイで大人気のシーフードレストランでの夕食とした。

学会3日目（8/23）

午前は「DAVF」のセッション。本日も最初のセッションからゲストがしゃべり過ぎでコーヒープレイクはキャンセル。Dは硬膜（dura）のことなので他科の先生にはなじみの薄い領域だが、脳血管内治療の分野では奥深く魅力的な領域。私の師匠のPierre Lasjauniasもこの領域の大家であった。それに加え最近では新しい塞栓物質や静脈側からのアプローチなども開発されていて、熱いディスカッションがしやすい分野のはずである。しかしレクチャー中心のセッションが主体で、ディスカッションもゲスト同士がメイン。参加者同士が討議するレベルに達するのはアジアではまだ先のことなのだろうと感じた。振り返ってみればこの会の第1回の北京では、質疑の時間になると通訳者が出てきて、英→中・中→英の通訳をして、これが国際学会？と冷笑したのであった。それを思えば隔世の感があり、これ以上を望むのは酷と言うものかもしれない。

8/24は朝の便に乗るので、本日は空港ホテルに宿泊することになっていた。バンコク市内から観光地を經由して空港で終了するという空港送迎を兼ね



図6. ワット・サマン・ラタナラムのピンクガネーシャ：ワットということからもわかるとおりここは仏教寺院であり大きな観音菩薩の大仏像もあるのだが、ここになぜかヒンズー教のガネーシャがいる。ただタイでは仏教とヒンズー教の混在は割とよくあるらしい。ミャンマーのゴールデンロックを模したモニュメントとか蓮型の小島もあり、宗教アミューズメントパークみたいなコンセプトと理解した。

た半日ツアーがあり、これを利用して空港に向かうことにした。なので、学会参加はランチまでで終了とした。1300ホテルでピックアップ、バンコクの東90Kmに位置する世界で最も大きな寺院と言われるワット・ソートン寺院と、その近くのピンクのガネーシャ像（図6）を見学して、18時スワンナプーム空港着。ホテルにチェックイン後空港のとは思えない極めて庶民的なフードコート（もともとは職員食堂らしい）で最後のタイ料理を満喫した。

今回の学会参加には、「仙台医療センター海外学会等旅費支給制度」を利用した。